

---

# 宇宙孤児の秘密

冴木雅行

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宇宙孤児の秘密

### 【Nコード】

N1873Z

### 【作者名】

冴木雅行

### 【あらすじ】

遠い遠い未来。人類は地球から別の恒星系へと旅立ち、数世代かけて居住可能惑星にたどり着いた。しかし、そこにたどり着いたのは、宇宙で子を産み育てた「宇宙世代」ではなく、冷凍冬眠技術によって眠りにつき、自覚めた者たちだけだった。やがて近恒星間航行が可能となり、惑星連盟という緩やかな共同体が成立しても、宇宙空間で子孫が生き残れなかったという惑星移住世代の心の傷は深く、宇宙で子をなすことはタブーだった。商船団が恒星系間を行き交い、内乱や戦争が宇宙空間で行われるようになったころようや

く時代は変わり始めた。宇宙での出産が相次いだ。地上の人は宇宙で一生を終えることはできない。たとえ宇宙空間で子をなしても、心身の限界により、親は地上に帰らなければならぬ。宇宙空間で生まれた子が地上で生きられる技術もなかった。このような不運な子らは「宇宙孤児」と称された。これは、「宇宙孤児」の誕生からさらに数百年未来のお話。

どうしてここにいらっしゃるのかと僕は、最も静かな戦場で思った。(前書き)

初投稿です。SFものですが、科学的知識に重点を置いていませんので、その点で矛盾が見られると思います。なので、SF(少し不思議)系の読み物と思っていただければ幸いです。有名SF作品のパクリ要素が多分に含まれますので、ご注意ください。

どうしてここにいるんだろうかと僕は、最も静かな戦場で思った。

宇宙空間での戦闘は、静寂に包まれていると何かで読んだ記憶がある。確かに、味方の艦隊が巨大な出力の光学兵器を連射していても、味方の戦艦が敵の攻撃で破壊され、撃沈されていても、艦橋は無音だった。

そう僕は戦場にいた。宇宙軍の軽戦闘艦の技術士官扱いのオペレーターとして。

本来、オペレーターの役割は、情報処理だ。艦内外の情報を把握して報告するものだ。いくらAIによる情報処理が主流になっているとは言え、人の目での確認、判断を不要としないのが軍隊である。とはいっても、僕のやることは限られていた。自分で組み上げたパーソナルAI（PAI）がほとんどの処理をしているからだ。

僕はパートナーであるPAIを「ミニ」と呼んでいる。名前は愛着を誘う。そもそもPAIのカスタマイズ自体は、程度の差こそあれ、誰でもやっている。ホログラミング・フィギュアを好みの異性（まれに同姓の人もいるが）にしたりするのは、一般人でもやっていることだ。着せ替え人形のようにしたり、変な語尾を付けさせるのは、「ヘンタイ」という侮蔑の称号を与えられる。なぜ、ヘンタイと呼称されるのかはよく知らないが、響きは侮蔑に向いていると思う。でも、僕のように、プログラミングから手を入れ、「育てる」のは、針の振り切れたマニアとしか言いようがない。言い訳はしない。反省もしない。

僕は、惑星連盟軍宇宙大学校工機科に所属しているが、この学生にもヘンタイは多くても僕のようなマニアは少ないらしい。とい

うのも僕は出会ったことがない。一度、僕が、P A I のプログラミング構造について、大学の同期に話をふったとき、全く話が噛み合わなかった。

僕が軍の大学に入ったのは、宇宙孤児という不運な身の上だっただけでなく、A I 研究のためだった。5年間従軍すれば、違約金も発生しない。軍の研究職にだって就けるかもしれない。そんな淡い期待を持って入学した。でも、入学してすぐにそんな淡い期待は、甘い夢だったと思い知らされた。軍隊というのは、研究に対する金に糸目を付けないものだ。しかし、それは利用可能性の高いものという限定つきなのだ。

A I は、生活のあらゆる場面で実用化されて久しく、デバックの必要すらないほどシステムの安定している。それは軍においても同じで、A I の構造を抜本的に見直すことは、コストパフォーマンスが悪すぎる。

このような言葉を、ゼミの配属志望聴取時でも、個人研究授業でも、さらには立ち話でも、少将待遇の学科長から軍のカウンセラーまで色んな人から何度も言われた。「固定観念を打ち破らないところに科学の発展はない」が口癖の老教授までもが同じようなことを言った。

こうして僕は、自分の研究計画が軍では受け入れられないことを悟り、しばらくの間、A I 研究を個人的な趣味に留めておくことにした。さっさと従軍義務を終えて、どこかの工科研究科に行こうと決心し、学業を淡々とこなし、寮ではミミを「育てる」日々を過ごしていた。

あの人に目をつけられるまでは。

## 幼女と巨乳美女（ただし、声のみ）

『負け戦ですね』

ミミが僕に語りかける。脳内で。10歳くらいの女の子の声。

僕はPAIの狂人かもしれないが、別に精神は病んでいない。ミミの発話は、耳に取り付けた疎通器具コミュニケーションによるものだ。PAIと脳との間で相互に電気信号を伝えることができる。歴史的にはバーチャルリアリティの発達に合わせて、このような脳電磁器具も開発されてきた。軍でも「訓練」や「尋問」にバーチャルリアリティが活用されているらしい。あと僕はロリコンでも、ペドフィリアでもない。ミミの成長を人間の成長に合わせているだけである。何て言うか、育ててる実感が湧くじゃないか。

『その通りだね、ミミ。でも、僕らの任務は終わってないし、僕はまだ死にたくはない』

僕は、心の中で話す。

『では、戦術目標の第一順位をマスターの生存、第二順位を任務の遂行に切り替えます』

『ちよつと待って、ミミ。第一順位は、僕と同僚と船団の人たちの生存にして』

『はい。マスター！』

元気の良い声。素直な娘に育ってくれているようだ。

『じゃあ、頼むよ』

この会話は時間にすれば一瞬、1秒にも満たない。実際には電気信号のやり取りなのだから当然といえば当然である。これが、僕が組んだPAI ミミの一形態だ。

「負け戦ね」

ミミとの対話が終わるや、それを見計らったように僕を戦場に連れてきた張本人の声がする。音声のみのプライベート通信。何で任務中に艦長がプライベート通信をするのかと至極真つ当な怒りを覚える。

マリア・フォーゲルト、惑星連盟軍宇宙大学校戦術研究科4年の先輩。金髪碧眼の超絶美人、成績良し、スタイル良し、家柄良しとの評判である。ただ、性格がひん曲がりすぎて、一回転しているからまつすぐに見えるというこの世の不思議を、僕はこの人に垣間見る。本人には言わないが。

「ええ。護衛艦隊の損傷率は2割をまもなく越えるでしょう。一方で敵艦隊にはほとんど損傷を与えられていません。戦意も高いと思われます」

意趣返しのもりで、艦長席の仮想ディスプレイに映っているであろう当たり前の情報を報告する。敵は、艦隊という名に恥じない陣容である。今は、攻撃が少し薄くなっているが、紡錘陣に組み替えるつもりだろう。攻撃しながら陣形を組み替えるのは相当の練度が必要なはずだ。下手にやると、味方を攻撃しかねない。

「・・・『宇宙海賊』なんてネーミングは間違いいね。今の宇宙軍の精鋭だつて、かの有名なクラフト中將の艦隊でもこれほどの動きはできないわ」

僕の答えが気に入らなかったのか、少しムツとした様子でマリアは言う。

確かに、マリアの言うとおりだろう。『宇宙海賊』は惑星連盟による呼称に過ぎない。商船団や輸送船など民間の船がこの宙域で行方不明になる事件が頻発したので、マスコミがそう呼び始め、惑星連盟も追従的にそのように呼称するようになっただけだ。僕らは、というか、惑星連盟そのものが、敵を見誤っていたのだ。



僕は、マリアにそそのかされて彼女の任官前実地訓練のサポート要員としてこの戦場にいる。そもそも、実地訓練というのは、戦闘地域や危険宙域に赴きはするが、そこで中難易度の任務を行うものである。マリアのチームが引き受けたのは、この宇宙海賊の跋扈する航路を通行する商船団を護衛するという任務である。正直、商船団もわざわざこんな宙域を通らなくてもと思う。ただ、護衛艦隊が商船団を護衛するので、マリアのチームがやるのは、苦情聞き、医療提供などのほかは護衛艦隊との連絡調整役で、事務作業効率と精神力が試される任務のはずだった。

僕は抜き差しならぬ理由で断り切れず、「まあ、簡単な任務だし私がいるからチョロいものよ」とのマリアの言葉を少しは信じてついてきたのだ。そして、ふたを開けてみれば、僕たちが停泊した補給基地をあんな練度の高い1個艦隊に急襲されたのである。そして、その報告をした僕に見せたマリアの態度は、一生忘れないと思う。マリアは「やっぱり来たわね」と満面の笑みで言ったのである。

「どうすればいいと思う？」

表情は見えないが、ニヤニヤ笑っている姿が容易に想像できた。

「艦長、私にどうすればいいかを語る資格はありません。軽戦闘艦の技術士官扱いですので。その相談は、まずは副長に、その上で教官にすべきでしょう」

僕は、あくまで任務中の態度を崩さない。崩してたまるか。

「もう、意地悪しないでよ。プライベート通信なんだから、マリアって呼びなさいよ」

甘えた声を出すマリア。意地が悪いのはあんだだと言いたいのをかるうじて我慢した。僕の堪忍袋は大きい。自分を褒めてあげたい。

「艦長、そもそも任務中にプライベート通信は「契約、わすれちゃった？」「」

「・・・分かりました」  
僕は、ため息を一つついて無駄な抵抗をあきらめることにした

こいつの所為だと思ったのは、抜き差しならぬ事態になってからだった。

戦いは一方的な展開になっていた。

敵は、そもそも護衛艦隊の2倍以上、陣容も我が軍で言うところの重量級戦艦5隻、巡洋戦艦20隻、軽量級戦艦に至っては1000隻を越える。主力は、軽量巡洋艦であるが、惑星連盟宇宙軍が5000隻を1個艦隊として数えているやり方であれば、総数は半個艦隊ほどもいる。一方、我が護衛艦隊の陣容は、その半分に満たない。しかし、重量級戦艦1隻、巡洋戦艦5隻、軽量級戦艦50隻というのは、護衛としては、十分すぎる。これまでの宇宙海賊の戦力規模を考えれば、襲撃自体があり得なかった。

護衛艦隊は、カイル・フォーツバニア少将が率いている。惑星出身組の将官は珍しくないが、一般兵からの叩き上げという点では極めて珍しい。敵の急襲と圧倒的な攻勢という混乱極まる自体の中で、戦線を維持しているだけでもフォーツバニア少将の能力の高さが分かる。しかし、それも敵が次の攻勢をかければ味方の戦線は一気に崩壊するだろうと他人事のように僕は思った。

僕が戦況を他人事のように考えざるを得なかったのは、我が艦がすでに護衛艦隊の後方から商船団を率いて離脱しているからである。敵部隊の急襲という事態を受け、臨時教官であるフォーツバニア少将から、実地訓練の任務の変更が申し渡された。護衛艦隊は、軽戦闘艦が1隻いても戦況に全く影響はないし、ましてや任官前のヒヨツ子准尉では話にならないのだろう。表向き、性格のねじれを隠しているマリアは、少将の指示に迅速に対応し、商船団を率いて戦場を離脱した。その手並みは、とてもヒヨツ子准尉のそれではなかった。マリア本人がヒヨツ子ではない自負がありながら邪頭に扱わ

れたことや戦術研究生としていわゆる弾丸（実際には光学兵器であるが）飛び交う戦場を離脱させられたことに対して不満に思わないわけがなかった。それ故の「どうすべきか。」との質問なのだろう。

「どうすべきかと聞かれましても、前方にいたいと思われる伏兵を何とかして、商船団を安全宙域まで送り届けるしかないと思いますが。」

僕は、そっけなく意見を述べる。

「あら、伏兵なんてどうして分かるの？」

マリアは、さも驚いたかのように聞く。僕は、マリアが後ろの艦長席でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていると確信した。

「敵はあれだけの大艦隊を用意して奇襲したんです。用意周到にもほどがあります。そうすれば商船団を戦線から離脱させない策があつてしかるべきです。でも、僕らは戦線を離脱できた。敵がとんでもないうっかり屋さんか、わざと離脱させたかと考えるのが普通です。おそらく商船団を無傷で捕らえることが目的と思われまます。」

「そうね。それで、伏兵を何とかするつてどうするの？戦術シミュレーションで私が唯一勝てなかったあなたの策が聞きたいわ。」

マリアは、甘く挑発するように言った。台詞が違えば、誘惑されていると勘違いしそうな声である。

「策といつても大した・・・」

と良いかけた僕の脳内に女の子の声が響く。

『マスター、デレデレしてる』

なぜか拗ねたような声でミミが言う。

『ミミの勘違いだよ。報告かい？』

電気パルスを読み取れるミミが勘違いする訳はないのだが、思わずそう言った。

『うん。この先の待ち伏せできるところと待ち伏せの人数とどうし

たらいいかを調べて5つくらい作戦を立てたよ』

『ありがとう。早いね。さすがだね』

『うん。マスターのためだもん。あと、さっきの悪い人たちの動きも調べたよ。』

『良い子だね、ミミは。』

『うふふ、私マスターだいさーびー!!』』

ミミと一瞬のやり取りをしていると、仮想ディスプレイ上に艦長から緊急呼出しがかかる。

思わず艦長席を振り返ると、マリアが獰猛な肉食獣が獲物を見つけたときの笑みを思わせる表情で手招きしていた。僕は、急いでオペレーターの仕事に任せるよう設定し、艦長席に向かった。僕は全身にびっしょり冷や汗をかいていた。

養母の教えは正しかった。

僕は、心の中でミミに頼むよと言い、艦橋の1段上にある艦長席に向かった。それにしても、マリアがミミとの会話に気づくはずはないのに不思議なことだと思う。そういえば、と僕はマリアが変に鋭かったことを思い出した。

工廠科出身者でも、士官である限り前線に立つことはある。宇宙大学の基本単位を取らせるための建前だけではなく現実にあるのだ。だから、基本訓練及び戦闘実習は工廠生でも単位取得基準が厳しい。無料で大学に通わせてもらっているのだから義務はあつて当然だと思う。

戦闘実習の中に戦術シミュレーションという授業がある。ゲーム好きも多い工廠生にとっては比較的ありがたい授業である。マリアを初めて認識したのは、その授業だった。この科目の単位取認定テストは、教官の代わりに戦術科の先輩が敵役をする。教官としては戦術研究科生の適性を見る機会でもあり、だいたい後輩はコテンパにやられる。これが工廠科生の通る道だった。僕たちの学年もその例に漏れず、成績優秀者でさえ、完膚なきまでに叩き伏せられており、時間切れの引き分けさえ、まれだった。

テストでは、当然ながら成績優秀者同士を当てるものである。可もなく不可もない戦績の僕は、同じくらいの成績の先輩と戦う予定であり、僕は負けるまでの時間をいかに引き伸ばそうかと考えていた。しかし、なぜか僕の対戦相手はマリアだった。あとで聞いた話だが、マリアの戦績は無敗。ぶっちぎりの成績優秀者だったらしい。

教官は、たいそう気の毒そうに「瞬時に負けても単位はやるから。」と僕に告げた。僕はあまり気にするでもなく、「はあ、ありがとうございませう」と表向きのお礼を述べた。でも、質問は決してすべきではなかったのだ。好奇心は猫をも殺すと養母が常々言っていたじやないか。

「でも、どうしてですか？」

士官を目指すものにとって理由を問うてはならないということも僕は分かっていなかった。教官は啞然とした様子で僕を見ていた。教官がなんと説明しようかと迷うそぶりしていると、僕の対戦相手が声を上げた。

「私のことをまさか知らないなんて言わないでしょう？」

自信に満ちた立ち居振舞い。スタイルの良さはトップモデル並みなんだろうと思った。

「私は工廠科なもので。申し訳ありませんが、存じ上げません。お名前を教えてくださいませんか？」

僕は、本当に知らなかったのだ。それがたぶんマリアの氣にくわなかつのだと思う。

「あんだ・・・いい度胸ね。」

この先輩の名前を聞くのに手続が要るはずはない。何がこの人を不機嫌にさせたのか。なるほど、人の名前を聞くときは、まず自分から名乗るべきと言いたいらしい。

「これは失礼しました。私は、シヨン・ヒルガと申します。」

「そんなことは知ってるわよ！・・・たく、戦術科3年のマリーベル・フォーゲルトよ。」

どうやら、選択肢を間違えたようだ。女性はよく分からない。でも、その名字には覚えがあった。

「フォーゲル先輩？・・・あ、突撃と速攻が得意な人でしたっけ。」

「そ、そうよ。」

ちよっとびっくりしたのだろうか、名前を知られていなかった怒り

が続いているのかちよつと顔が赤い。

「それは、失礼しました。先輩の突撃、速攻の見事さにアーカИБをいくつかほぞん、いや見たことがあつたんです。でも、お会いしたのは初めてですよね？」

「ほ、誉めても無駄よ。でも、ま、まあ私のアーカИБを見るなんて見所あるわね。」

なんか急に見所のあるやつに昇格したらしい。

「いえ、どうしたらあの速攻を防げるかと考えていたんですけど、工廠科の僕にはさっぱり。」

お世辞のきく人だと思つた僕は、さらに持ち上げようとした。

「私のアーカИБを見たなら私の実力が分かるでしょう？何でも言うことを聞かつて約束するなら、手を抜いてあげても良いわよ。」  
言つてる意味が分からない。ただのテストで何で我が身の自由を賭けないといけないのか。評価不能の負けなら追試を受ければいいのだ。

「せつかくの申し出ですが、遠慮しておきます。私はこの授業に人生賭けてないですから。別に手を抜いていただいても、結果に変わりないと思いますので。」

「勝負から逃げるわけね、男らしくない。」

何で挑発されているのだらう。まるで素行不良の輩に絡まれた気分がする。この手の人の行動原理は理解できない。

「勝負と仰いましたが、ご自分が相手に有利な条件のもとにいらっしやるのですから、逃げることになんのためらいも生まれません」

「・・・じ、じゃあ、ハンディを付けてあげるわよ。構わないでしょうが、教官？」

教官は僕の方を気の毒そうに見て頷いた。テストとは言え、たかだか授業なのに何でこんなことになるのか。ただ、この人は、意味不明の行動原理でどうしても僕と賭け勝負がしたいようで、断れば別の機会にまた絡まれそうな気がする。

「ハンディをもらう代わりに、負けたら僕はどうなるんです？」



「私が勝つたら、生まれてきたことを後悔するくらいに辱しめてやるわ」

僕は、助けを求めて教官を見た。教官は目をそらした。  
(責任者が逃げやがった。)

たかがテストに僕の人としての権利がかかる。そんな事態になった。口は災いの元だと養母が言っていたのを思い出した。

結局、僕が貰ったハンディは、積載物資の変更と通常よりも10分多い準備時間、そしてPAIの使用だった。そもそも、このテストは初めから工廠科生にハンディが与えられている。1個艦隊同士の艦隊戦なのだが、戦術科の先輩は、標準的な編成の艦隊を指揮することになる。一方、工廠科生は、編成自由、戦場の決定権もある。しかも、戦術科の先輩は勝利が必要だが、我々は艦隊として戦闘不能に追い込まなければいいのだ。それだけのハンディがあってもなお、工廠科生は負けてしまう。

僕が、マリアの模擬戦のアーカイブを保存(PAIに保存する)とは基本的にできない仕様になっている。(したのは、ミミの思考訓練のためだった。別に戦術シミュレーションでいい得点をとろうと思ったからではない。もし、そうなら僕はもっと良い戦績を修めている。ミミは、戦術シミュレーションが得意、というか好きなようだった。今では1度見せると、僕が考えるよりも優秀な対応策が数種類返ってくる。それ故、僕にはそれなりの勝算があった。こうして僕は、人としての尊厳の危機を回避すべく、ミミと共に望まぬ戦いに身を投じることにした。

「準備時間中、だれか女性としゃべっていなかった？」

マリアが仮想ディスプレイ越しに聞いてきた。

「まさか。フォーゲル先輩もそこにいらっしやっただでしょう？」

「・・・そうね。それよりも準備はできたのかしら？」

「ええ。戦場はアルワナ小惑星域でお願いします」

「聞いたことない場所ね…まあいいわ。それにしても、君、余裕そうに見えるわね」

「半分あきらめで、半分後悔してるんですよ。お手柔らかにお願いします」

「それはダメね。今日から君は私の奴隷になることが決まっているんだから」

僕はため息を一つつき、教官を見た。教官は頷いて開始を告げた。

「は？何これ?!」

マリアが変な声を出す。まあ、そうだろう。艦隊の編成があり得ないのだ。

「テーマは宇宙海賊です」

僕は、この編成のコンセプトを告げた。

愛情を持って育ててきたのに、非行に走りそうな娘を見て、僕は不謹慎にもそ

マリアに聞こえるはずはないのだが、僕とミミは、こんな会話を交わしていた。

『マスター、大変なことになっちゃったね。あの年増女のせいで』

『年増って、いつの間にそんな言葉をおぼえたの?!』

娘の非行は、愛情不足が原因と言われる。僕は、さらに愛情をかけてミミを育てようと決意した。

『ミミが用意したこの作戦なら絶対に勝てるよ。』

僕の眼前に、作戦の概要が示される。僕がかけている《マルチグラス》に映っているのだ。

『ええと・・・うわあ。これは悪辣だな』

僕は、そんな感想を述べた。ミミが提案した作戦は、確かに戦術シミュレーションで負けない方法としては最適と思ったが、どう考えても正規軍がやる作戦ではなかった。

『あくらつって?』

『とても意地悪だということだよ』

『意地悪しちやだめだった?』

ミミは、シュンとした声を出す。

『いや、ミミは一番いい作戦を立てたんだよ。心配しないで。うん、これで行こう。そうすれば、僕は奴隷にならなくて済むし、あの先輩も面目が保たれると思うからね』

僕らの戦いを観戦しようと思ってきた人々をみれば、どうやらマリーベル・フォーゲルト先輩、通称マリアには、熱烈な支持者がいるようだ。僕が徹底的に悪役を演じれば、卑怯な手段をとられたから負けたと思ってもらえるだろう。そうすれば、僕が勝っても、少なくともマリアの評価は下がることはない。僕への敵意や関心を減らすのは別に方法を考えればいいだろう。

こうして僕は、「宇宙海賊」を演じることにした。

ミミが戦場に選んだアルワナ小惑星域を、マリアと同様に僕もこの時まで知らなかった。不思議なことに、ミミには、膨大な数の恒星系の地理データが、最初から頭に入っている様子なのだ。僕が教えた知識でなく、ミミが自分で学習したデータベースでもない（そもそも、恒星系の地理データは一部しか公開されていない。）ので、そう考えるしかなかった。ミミを公にできないのは、僕にヘンタイだとかロリコンだとかの不名誉な評価が与えられる恐れだけではなく、僕にもよくわかっていない秘密がミミにありそうだからなのだ。

アルワナ小惑星域は、恒星アルワナを中心とした星系にある。恒星アルワナは老年期終盤を迎え弱い光を放っている。かつて周囲を公転していた惑星の大きささまざまな残骸が、帯状に広がり今なお主星の周りを公転し続けている。恒星アルワナと小惑星域の間に布陣すれば、外部からの侵入経路が限られる。小惑星域はその帯の外に向かうほど残骸の密度は薄く、中心に行くほど密度は濃い。最も密度の濃い中心部ですら相当広く、ここを回避してこちらまでたどり着くするには、ゲーム内時間で1日かかり、それだけで時間制限に引っ掛かる。それゆえ、敵艦隊が攻めてくるとすれば、残骸の隙間を縫う狭い天然のトンネルをくぐってくるしかない。突撃と速攻を得意とする敵艦隊にとっては、厄介な布陣となるはずだ。

マリアが驚いたのは、僕の艦隊の編成である。通常、1個艦隊の編成においては、軽量級から重量級の巡洋艦が主力となる。そして、分艦隊指揮に巡洋艦を割り当て、部隊指揮に軽量級戦艦を割り当てる。あとは、火力と機動力のバランスによって、重量級戦艦の割り当てを決めるのである。僕は、巡洋艦の編成を全く変えた。通常、

2500隻ほど割り当てる軽量巡洋艦を外して、工作艦と輸送艦に割り当てたのだ。工作艦は、機雷敷設、惑星降下など特殊作戦用の艦であり、輸送艦は、非戦闘要員や物資を輸送するための光学兵器を搭載していない艦である。火力を考えれば、僕は勝利など絶対に望めないはずと考えるだろう。

開始直前30秒間、相手の艦隊編成が見れる仕様になっている。マリアは不審に思ったはずだが、歴戦の猛者であっても、30秒間考えたところで、艦隊編成のみでこちらの作戦を読むことはできないだろう。マリアは、眉根を寄せて考えている様子だった。やがて、開戦の合図が出され、僕の人としての尊厳がかかった戦いが開始された。明らかにけんかをふっかけられた側の僕が悪役を演じざるをえないところが釈然としなかったが、これしか方法がなかった。

開戦の合図を聞かぬやいなや、マリアは、艦隊を密度の薄い方形陣から、素早く陣形を再編し始めた。それはそれは、見事な艦隊運動だった。ゲーム内時間で1時間ほどで、横につぶれた半球陣に再編成をしたのだ。

『さすが、戦術研究生の中でトップスピードを誇るだけのことはあるね。じゃあ、ミミ』

『小惑星帯のどの部分に砲火が集中するかを計算するんですよ？』  
『そのとおりだ。僕の指示がなくてもミミはひとりできそうだね』  
『嫌！マスターがおしゃべりしてくれないと嫌だもん。・・・計算完了したよ。』

かわいい。報告が丁寧じゃなくなっているのが特に。娘にメロメロな父親はこんな感じだろうか。

『じゃあ、次はアレを動かそう』

『はい、マスター』

マリア艦隊が動く。速攻である。砲火を集中させるのに最も効果的な場所に最大戦速で移動する。

「撃て！」

マリアは、艦隊指揮官よろしく、号令をかける。

光学兵器は、実際の戦場では目に見えないらしいが、戦術シミュレーションは便宜上光の筋が描かれる。半球陣から一斉に放たれた光の筋が束になり、小惑星帯の1点に集中する。小惑星帯に穴が開く。

「第二射、撃て！」

早い。おそらく普通の人は、照準を定め直すのに時間を要するだろう。それをしないということは、マリアが何手先もの指示を考えているということだ。

再度、半球陣から光の束がさつきよりも奥をめがけて放たれる。時間制限がある中では、この戦術しかないのだ。しかし、マリアは無駄がなく、早い。たくさんの小惑星を吹き飛ばし、トンネルを穿つ。

「ビー！ビー！マリア・フォーゲルト、ペナルティです。5分間行動不能になります。」

機械的な音声が響いた

「え？！・・・何？非戦闘艦の撃沈？どういうこと！」

マリアは叫ぶ。僕は、混乱しても気品のある人はいるんだなあとほんやりそんな事を思った。

「僕の艦隊の輸送艦が、先輩の艦隊の射程距離内で白旗を上げて、救難信号を発していたはずですよ。」

「そんなバカなことってある？教官、ルール違反ではなくて？」

教官に対して堂々たる態度のマリア。

「いや、ルールにはある。艦隊戦シミュレーションでは使わないが。」

「そもそもルールにないことはできないようになってはいるはずですよ、先輩。」

「く！」

5分のペナルティ、ゲーム時間内では2時間余り浪費することになる。残りは20時間弱となる。

「どうやら、同じことを恐れて速攻と突撃はあきらめてくれそうですね。」

「あの狭いトンネルを通ってもらわないと、いけないですもんね、マスター」

「そうだね。じゃあ、白旗と救難信号は相手の射程内に入ったら出すように設定して。」

「もうやっておきました。次のも用意しますか？マスター」

「そうだね。時間を見計らってやってくれる？」

「はい、マスター！」

5分のペナルティを終え、艦隊を再編する。予想通り、縦列陣を組み、小惑星帯のトンネルを抜ける作戦に切り替えたようだ。しかし、早い。予想よりもはるかに速い。チラッとマリアに目をやると、異常な集中力でキーを叩いていた。

1時間も経たないうちに、縦列陣を完成させ、小惑星帯に突入した。

本当に無駄のない陣形である。基本的に忠実なのだが、少しでも前後の距離を縮めようとやや円柱に近い形になるように組まれており、芸術的とすら思える。

トンネル内には、マリア艦隊が加速するタイミングを計算し、その直前に救難信号を発する輸送船団を何重にも配している。ちなみに僕は何もやっていない。ミミがやった計算である。

「くっ、悪辣ね」

マリアが思わず漏らす。

「宇宙海賊にとってはほめ言葉です、先輩」

『あの年増、悔しがつてるね、マスター』

明るく、悪口を言うミミ。そんな娘に育てた覚えはありません。

いや、今僕は、悪役で、戦闘員を乗せた艦を盾にするなど朝飯前なのだ。ミミも悪役に徹しているだけだと思う。そう思いたい。

マリア艦隊は、手際良く輸送船を救助しトンネル内を進む。それでも、これが10回を超えるころには、マリアのイライラも頂点に達していた。

『そろそろ、敵も強硬策に出るはずだ』

『うん、もうタイミングは計算して、次のもやっておきました！』

『本当にすごいね。ミミは』

自分が育てているPAIをほめたたえるなんてゆがんだナルシズムだと自分でも思う。でも、本当に出来がいいのだ、この娘は。

1つの場所で救助を求める輸送艦の数を、進むごとにどんどん増えるように配置している。マリアが、今出会っているのは、トンネル内を埋め尽くすほどの数の輸送艦だろう。ここで、変化が起きた。マリアが軽量巡洋艦を前に出し、輸送艦に低速で体当たりをさせ、



道を空ける作戦に切り替えたのだ。これだけ同じ策で邪魔をされると、誰でもさすがに焦る。陣系を崩してでも早く進みたいとの欲望には、さすがのマリアもかなわなかったようだ。しかし、焦りは、冷静さを失わせ、観察眼を曇らせる。

この先、輸送艦は、これまでの半分ほどの距離ごとに現れる。しかし、違いはそれだけではない。輸送艦に物資輸送用のポッドが艦下部に結わえつけられている。また、輸送艦自体に、最低限のシステム維持用しか燃料が残されていないのも特徴である。救難信号の内容もそのことを伝える内容に変化しているのだが、マリアは気づくだろうか。

結論からいえば、気付かなかった様子である。軽量巡洋艦に低速で体当たりをさせ、道を空けて先を急ぐ。間隔をおかずに出てくる輸送艦、先を急ぐために、空ける道の幅は狭くなっていく。だんだん隊列が伸びていく。

『今だ！』

『はい！マスター』

僕の指示、いや、ミミの指示で、物資輸送用ポッドに取り付けられている自動エンジンが一齐に火を噴いた。一気に全力でブーストする。当然輸送艦は、それにつられて進もうとする。しかし、ポッドが結わえつけられており、姿勢制御も十分でない各輸送艦は別々の方向に進もうとする。輸送艦同士がぶつかる。全力でブーストしているエンジンに輸送艦がぶつかる。コントロールを失った輸送艦がマリア艦隊にぶつかる。狭いトンネルの中で多重事故が起きた。あちこちで爆発が起きる。マリア艦隊は、この策によって、四分五裂に分断されてしまった。

「ビー！ビー！マリア・フォーゲルト、ペナルティです。5分間行動不能になります。」

「何だよ！」

憤怒の声を上げるマリア。

「いや、救難信号を無視した結果ですよ、先輩。輸送艦はちゃんと情報提供していたはずですよ。姿勢制御用の十分な燃料もないって。」  
「くっ……」

ペナルティが終わり、トンネル内の混乱も収まるころ、マリア艦隊の実働艦数は半減していた。

気がつけば、ゲーム終了まであと5時間になっていた。

## 勝者と敗者は紙一重

ゲーム内の5時間は、現実の10分強である。

あと10分間、僕の艦隊に攻撃をさせなければ僕の勝ちだ。しかし、敵は、極めて優秀な艦隊指揮をするマリアである。5時間あれば逆転も可能かもしれない。

『マスター』

ミミの声が脳内に響く。報告モードではない。

『どうした？』

『あの年増は、すぐに小惑星帯を抜けてくると思うの。』

『どうしてそう思うんだい？』

『計算してみたけど、今いる位置から戦略級兵器を使えば一発で抜かれるよ。』

戦略級兵器、特殊砲とも言うが、主に重量級、それも旗艦レベルの艦にしか備え付けられていないものである。威力は強大だが、エネルギーの充填効率が悪く、艦隊戦で使用することはほとんどない。充填している間に、相手が射程距離外まで逃げる事ができるからだ。いわゆる攻城用兵器と言える。

『ああ、なるほど。マリアの旗艦は、半分よりも前にいたんだ。後方で足止めされてもおかしくないのに…何というか、戦いの勘みたいなものなのかもなあ。そうだ、ミミ。敵が小惑星帯のどの部分から抜けてくるか計算できる？』

『もうしてあるよ、マスター』

ディスプレイには、3つの選択肢が示されている。まだ動けるマリア艦隊が現在いると推定される場所から、仰角15度、俯角20度、俯角30度にまっすぐ来た地点が示されている。最短はまっす

ぐなのだがまっすぐだとまたペナルティを食らう恐れがあるので、マリアは上か下に角度をつけて撃つはずだ。そして、この3つの角度以外に向けて撃った時には輸送艦が配置されているので、マリアの負けが確定する。

さて、ここからは確率の問題ではなく、心理学の問題である。

当然角度の浅いものが最短になるので、普通に考えれば上に来る。ただ、これまでのマリアが通ってきたトンネルは、左右に振られるものの緩やかな登りになっている。レーダーでトンネルの構造が確認できないので、これまで通ってきた道を頼りに予測するしかない。とすれば、マリアの立場に立てば、少々遠回りになっても、俯角30度の出口に特殊砲を撃つのが妥当と思われた。

『僕は、一番下から来ると思うけど、ミミはどう思う？』

『ミミは、一番上から来ると思う。』

『どうして、そう思うの？』

『うーん、わかんないけど、あの年増はそうする気がする』

『・・・ミミが、気がするって言うのは、初めてだね。』

『うん。人が選択する確率からいえば、一番下だと思っただけど、これまであの年増のアーカイブを見ていてそんな気がするの。なんかうまく説明できなくてごめんなさい、マスター』

PAIが勘に頼るのは正直びっくりしたが、自分の常識に従うか、戦術アーカイブを詳細に記憶し、分析しているミミに従うか。結局僕はミミに運命を委ねてみることにした。自分は戦術のプロではないのだ。それに、失敗しても次善策はある。

『じゃあ、本隊を4つの分艦隊に分けて、一番上の出口にちょうど火力が集中するように配置。あと、工作艦を縦陣にして、本隊と一番下の出口の間、小惑星帯から30光秒の位置に移動』

『はい！マスター！』

この会話の後すぐに、一番下の出口から高出力のエネルギー波が噴き出た。しかし、最大戦速で殺到してくるはずの艦隊がやってこない。僕は待つ。でも来ない。有利なはずの僕が、追い込まれているような気分になる。艦隊を動かしたくなかった。

『マスター。下の出口は、あの作戦で防げるよ。大丈夫だよ』

ミミの声。これがなければ、僕は艦隊を動かしていたと思う。少し冷静さを取り戻した僕は、時間を無駄にはできないはずのリアが焦らしているのだ。何か策があるのだろうかと思ひ、待つことにした。そして、ようやく艦隊らしき集団が下の出口に姿を現わしたその時、一番上の出口からエネルギー波が噴き出たのだ。僕が工作艦と本隊を分けていなければ、おそらく後背を突かれ危機に瀕していただろう。ミミと意見が食い違っていなかったら、その瞬間に負けが決定していたのだ。

下の出口から出てきた艦隊は機動力重視の部隊編成だった。こちら側の空間に出るや、上の出口にいる我が本隊に向かって、楔形陣を組みながら突撃してくる。反応が早い。

『ミミ、工作艦に号令を。下の艦隊をよく狙って。』

『はい、マスター』

ミミの指示で、工作艦が一斉に最大速度で小惑星帯に向かって前進を開始する。工作艦はそれぞれ大きな惑星の残骸を曳航していた。工作艦が加速する。工作艦は敵地近辺での任務を帯びることがある。それゆえ、加速と小回りの利きは艦隊一である。

『今だ！切り離せ』

最大速度に至った瞬間に、曳航していた惑星の残骸を切り離す。惑星の残骸は慣性の法則に従って、亜光速で飛んでいく。下の出口から出てきたマリア艦隊の横っ腹に向かつて。1500もの工作艦が

一斉に大きな質量の物体を放ったのだ。密集隊形を取りつつあった分艦隊は、側面からの攻撃をよけきれなかった。装甲の薄い巡洋艦はひとたまりもなく、吹っ飛ばされる。吹っ飛ばされた巡洋艦がほかの巡洋艦を巻き込んで、小惑星帯に衝突する。爆発が起き、爆風で制御を失った艦に別の巡洋艦が突っ込む。この攻撃は、連鎖的な事故を生み、分艦隊はそれに飲み込まれる形で行動不能に追い込まれた。

ちょうどそのとき、火力重視の艦隊が上の出口に殺到した。まさに間一髪である。

「撃て！」

僕が、艦隊指揮官のような号令をかけるとは思ってもみなかった。勢いで言ってしまった。

ミミが計算した通り、上の出口がちょうどクロス・ファイヤー・ポイントに当たり、集中した火力が、戦艦の厚い装甲を撃ち抜く。しかし、マリア艦隊は退かない。味方の屍を乗り越えて、果敢にも死地を切り開こうとする。こちらも気を抜けない。

現実の時間で、ゲーム終了まであと1分となった。

そのとき、下の出口からマリア艦隊の旗艦が出てきたのだ。戦略級兵器のエネルギー充填を終えた状態で。主砲がこちらを向いた。

「撃て！」

マリアが号令をかけた直後、時間切れ終了の合図が出された。

論理的帰結では、戦場で生き残ることはできない。

「艦長、シヨーン・ヒルガ上級技術軍曹、出頭いたしました」

僕は、駆け出し士官丸出しの敬礼をする。マリアも敬礼で応えるが、どうも僕のそれとは似て非なる慣れた所作だと思う。

「ご苦労さま。ブリーフィングを始めるわ。そこに掛けて」

椅子が競り上がる。テーブルをはさんで僕の向かい側には、副長と砲術長が座っている。どちらも戦術研究科生の先輩で、マリアが率いるチームのメンバーである。年上に囲まれ、まじまじと見られると居心地がよくない。しかも、副長であるカール・スワミノフ先輩は、僕がここにいるのがどうしても納得できないらしく、忌々しそうな表情で僕を睨んでいた。イケメンに睨まれてもうれしくないなあと思ってその左に座る砲術長を見る。砲術長は、ウェーブのなかった黒髪が特徴的で、たおやかな笑みを浮かべている女性だ。名前は確か、ベルタ・アダルベルト先輩だったはずだ。この微笑みに魅了される男性は多いのだろう。しかし、僕は、彼女が見た目通りではないことを知っている。何せマリアと行動をともにしているのだ。推して知るべしということだ。カールのことを「雰囲気だけのキモいナルシスト」だの、「出身惑星の重力が重すぎて、背丈も××も極小」だの、同じ男性として聞くに堪えない悪口を微笑みながら言っていた。そして、そこにカールが現れても悪口を続けるような人だ。僕だって、知らないところでなんて言われているか分からない。

「艦長、我々は3人チームで、彼はあくまでサポート要員です。決定的み伝えればそれで足りるものではありませんか？」

カールがマリアに言う。マリアは、それに答えず、笑みを浮かべて

僕を見る。

「艦長、スワミノフ副長のおっしゃる通りです。先輩方の訓練ですし、私は控えていた方が宜しいかと思いますが」

僕は、仕方なしにカールの提案を後押しする。そもそも訓練の当事者扱いされるのは遠慮したいし、マリアが提案することにろくなことはない。君子危うきに近づくかと養母も言っていた。

「まあまあ、この艦に人間は4人しかいないですし、彼を邪魔者扱いするのはいけませんわ。」

ベルタが逆のことを言う。それは、要らないフォローです、先輩。

「俺は、邪魔者扱いなどしていい。実地訓練のことを考えて提案しただけだ」

「まあ、そうでしたの？艦長をスト キングしたり、舐めるように艦長の足やら腰やら胸やらを見ることもあなたの実地訓練ですね」詩を読むのに適した美しい声なのに、内容はひどい悪口だ。

「な！」

カールは赤く固まる。先輩、安い挑発に乗らないで下さいよって、反論しねえのかよこの人。「ぐぬぬ…」じゃねえよ。

「…まあ、私が必要と思ったので呼んだままだ。さて、シヨーン、現状の報告をしてくれる？」

「分かりました。さて、目的地ですが」

コンソールを叩くと、各自の前に仮想ディスプレイが現れる。

「この先、商船団を保護できる安全宙域と言えば、トラディカ星系のみです。燃料の関係で超光速航行は1回しかできないからです。

少なくとも追手は来ていませんが、時間がかかれば追手が来ると考えて間違いないと思います」

「おい、我が軍は、カイル少将は、簡単には負けないぞ」

「ええ、副長のおっしゃるとおりです。カイル少将は歴戦の名将ですし、簡単に負けないと思います。ただ、あれだけの兵力差です。

我々を遠くまで逃がしたうえで、離脱を図るのではないでしょうが」「ふんっ…宇宙孤児の機械屋に何が分かる」



できる限り刺激しないようにしてるつもりなのだが、何を言ってもダメらしい。背丈も心も小さい人だと思う。

「背丈も心も小さい人は放っておくとして、私もカイル少将が逃げるとは思わないけど」

ベルタがカイルの悪口を言いながら、質問する。僕はマリアを見る。マリアが僕に先を促した。

「ええ、確かに。おっしゃることは分かります。しかし、そもそも私たちが今、率いている商船団をカイル少将のような名将が1000隻余りの艦隊を連れて護衛すること自体がおかしいとは思いませんか？」

「宇宙海賊対策にきまつてるじゃないか。貴様はバカか」

「そうなんです。副長の言うとおり、『宇宙海賊対策』です」

「なるほどね。分かったわ。それならカイル少将たちは、頃合いを見て離脱するわね」

うなずくベルタ。マリアもうなずいている。カイルは、彼女らを見て焦り、自分も分かったようにうなずく。

つまりは、護衛艦隊というよりは、敵状視察がカイル少将の主な任務なのだろう。ある程度戦って、戦力や艦隊編成などの情報を持ち帰るのが主たる目的とすれば、頃合いを見て離脱するはずである。

「話を戻します。できる限り最短でトラディカ星系にたどり着くためには、我々が今入りかけているメディニカ星系を抜けてから、超光速航行を行うことになります。」

「すぐに超光速航行に入ってはダメなのかしら。」  
ベルタが聞く。

「それは、技術的な側面から推奨しません。恒星系内は、重力場が安定していないので超光速航行のリスクが格段に上がります。今回は民間船を率いていますので、リスクは避けるべきかと思えます。」

「で、メディニカ星系を抜けるルートは限られていて、そこに伏兵がいる。というわけね、シヨーン」

「はい。艦長のおっしゃる通りです」

「伏兵?!か、艦長、どうしてそんなことが分かるんです?」

「脳みそまで小さいなんて、神様はなんて不公平なんでしょう」

ベルタ先輩は、たぶんDSなのだ。

「うるさい!...その宇宙孤児、貴様も分かってないだろう」

「私は、シヨーンからさつきプライベート通信で教わったのよ」

「な!...貴様、任務中に艦長とプライベート通信なんかしやがって、帰還したら報告してやる」

「私、見てたけど、マリアからかけてたわよ。報告するとマリアが訓告をくらうと思うけど」

「ぐぬぬ...」

カール先輩すっかりしてください。本当に「ぐぬぬ...」じゃねえよ。成績はいいはずなんだけどな、この人。

マリアが指摘したとおり、メデイニカ星系を抜けるルートは限られている。それは、補給基地を襲われたため、エネルギーの補給が十分にできなかったことが原因である。我々は最短ルートで進まなければ星系を抜けられないのだ。そして、その最短ルートには、伏兵をひそめるには絶好の小惑星帯を抜けなければならない。八方ふさがり。負けが決定しているようなものだ。敵ながらあつ晴れだなあと僕は思う。

「で、問題は対策ね。副長、今シヨーンから状況とルートについて説明を受けたけど、対策はある?」

マリアは、カールに話を振る。

「...小惑星帯を突っ切るルートは狭いですがトンネルというわけではなさそうだし、曲がりくねっているわけでもないようです。なので、伏兵がいると分かっても、最大速度で一気に突っ切るしかないと思います。幸い、この艦も商船団もアシは早いので」

カールの対策はスタンダードであり、悪くない。欠点は、論理的に考えて誰もが行きつく結論であることだ。敵はここまで戦略的に追い詰めてきているのだ。僕らが生き残るためには、誰もが行きつく結論にひとひねり加えて、敵の裏をかくことが必要なのだと僕は思う。

「シヨーン、あなたの対策は？」

「基本的に、副長の作戦しかないと思います」

カールは、少し安堵の表情を浮かべる。

「基本的にということとは、例外があるのかしら？」

ベルタが聞く。

「もちろん、基本以外の作戦はあると思います。たとえば、できる限りち密な計算をして星系内で超光速航行をするとか、漂流覚悟で遠回りするとか。でも、その場合、一か八かの賭けになると思いますが、推奨しません。私が考えるのは、副長の示された基本策に一工夫をするということです。」

カールが何か言いたい様子だったが、マリアが目で制する。僕は、作戦の基本概要を説明した。

「さすが、悪辣な宇宙海賊を演じてマリアを追い詰めただけはありませんわね」

「やめてください、ベルタ先輩。あまり思い出したくない過去なんですから」

僕がマリアに目をつけられ、こうして戦場まで出てくる破目になっただきっかけなのだ。あのテストを休んでいれば、僕は平穩無事な生活を送っていられたのだ。

「シヨーンの言った作戦で行くことにするわ。それと、副長に商船団の船長たちへの作戦説明及び商船団の旗艦操船補助を命じます。」

「わ、私ですか?!」

「そうよ。あなたは、操船が得意だったでしょ。この作戦は、商船団が無事あの小惑星帯を抜けないといけない。操船次第で、作戦の成否が決まる。あなたの力にかかっていると云っても過言ではないわ」

「は、はい！謹んで拝命します」

カールは意気揚々と連絡艇に向かっていった。

安い男だとベルタが声を出さずにつぶやいていた。

マリアは単にカールに面倒事を押しつけたに違いないと僕は思った。商船団の操舵手これくらいの操舵はお手のものだろうし、歴戦の船乗りの中に飛び込んで、彼にできることはほとんどないと思えたからだ。

「これくらいの作戦は、マリア先輩なら考えついていたはずですが」「ええ。でも、シヨンに負ける前なら思いついてなかったわね。

たぶん、カールの言った作戦でやって、かろうじてこの艦だけ生き延びる。そんな感じだったと思うわ。」

「いやいや、それはないでしょう」

急にマリアが自嘲的に言うので、僕は思わず否定した。それに、あ  
のときも今回も僕というよりは、ミミが考えた作戦なのだ。

「あらあら。邪魔者がいなくなった途端に、お熱いことですね」  
ベルタが言う。ベルタが、この会話のどこにそんな要素を見つけたのか分からないが、明確に否定しておこう。こんな性格がひん曲が  
って1回転したような女と恋人に見られるのは御免被る。

「ベルタ先輩の邪推ですからね、それ」

マリアを見ると、なぜか不機嫌そうに目をそらされた。女性はよく  
わからないと改めて思った。

## クライ・フォー・ザ・ムーン

『ボウズ、姐さん艦長はいるかい』

通信が入る。商船団のリーダーであるトマス・ニツカからである。宇宙孤児に多い、黒髪、黒目で、ガタイの良い、男くさい歴戦の船乗りといった風貌である。僕のことを「ボウズ」と呼ぶが、嫌な感じは受けない。たぶん同じ宇宙孤児としての愛称なのだと思う。

「ニツカ船長、作戦のことで質問かな？」

マリアは、艦長然とした態度で答える。

『ああ、あんたが寄こした小つこいのじゃ話にならん。これまでのようにボウズから連絡を受けた方がまだよかつたぞ』

「それはすまない。これから私たちとあなた方の命がかかった作戦をやる。私たちは軍人とはいえ、まだヒヨっ子だ。自分たちだけ体よく逃げかねないと疑われてはいけなないと考え、信頼の証として、副長をそちらに寄こしたのだ」

『そりやまた、立派な言い訳を用意したな、姉ちゃん。正直言つて、あの小つこいのが邪魔だったんだろ』

「…慧眼に感服する。いや、彼は能力も悪くないし、ことさら邪魔をするわけでもない。ただ、現時点では船乗りとして欠点が多すぎると思う。差別意識が強いのもその一つだ」

『なるほど。そりやあ、あれかい。その辺をこっちで叩き直してやればいいのかい？』

「特別な指導までは結構だ。船乗りとして大事なものを見て学ばせてもらえればいい」

『それくらいなら、お安いご用だ。こっちも色々迷惑をかけてるが、あんたは嫌な顔一つせず対応してくれてるからな。』

「それは助かる。感謝申し上げます。」

『照れくさいから、感謝なんていらねえよ。で、ありゃあ、あんたの作戦かい？』

「いや、あんたが『ボウズ』と呼んでいるシヨーン・ヒルガ上級技術軍曹が立てたものだ」

『ほづ。じゃあ、ボウズに聞くとするか』

僕は、改めて作戦の概要を説明する。

『なるほど。じゃあ、伏兵は、俺たち商船団を無傷で捕えたいってわけかい』

「ええ。その目的は不明ですが、これまで我が軍が商船団や輸送船の行方不明現場の検証を行った限りでは、現場の兵器使用の痕跡や艦の残骸がないことから、攻撃を受けていないと思われず。」

『と言うことは、素直に投降せざるを得ない状況に追い込まれてこつたな』

「おっしゃる通り、圧倒的な戦力で囲まれるなど逃げる事ができない状況に追い込まれた可能性が高いかと思えます」

『なるほどな。で、敵への対策はあれでいいのか？』

「ええ、民間船であるあなたがたに戦う義務はありませんが、今回は特別にお願いせざるをえず、申し訳ありません」

『何をいつてんだ。何もせず訳のわかんねえ敵に捕まるよりゃあ、抵抗するのが漢つてもんだろ？』

「うちの艦長は女ですがね」

『字がちげえよ。あの艦長も立派な漢だよ。ボウズから伝えといてくれ』

「それ、喜びますかね？伝えたことで、私が睨まれたら船長に謝罪と賠償を要求しますよ」

『それこそ自己責任つてやつよ。まあ、何にせよ姉ちゃんとボウズに命を預けるわ。よろしく頼むぜ』

「こちらこそ。この艦のことは気にせず、逃げ切ってください」

ニツカは破顔一笑し、立派な敬礼をして通信を打ち切った。

僕はオペレーター席に戻り、ミミに話しかけた。

『ミミ。ミミ?』

『…マスターなんて、あの年増と修羅場になって刺されて死ねばいいもん』

『ミミ?!』

『勝手に置いてくんだもん。マスターなんて嫌い』

おお、そこはかとなくシヨックが大きい。娘に「パパ、嫌い」と言われたらこんな悲しい気持ちになるのか。

『ごめんね、ミミ。』

娘だったら、頭をなでたりするのだろうか。

『悲しい?頭なでる?』

『そういえば、考えたことが分かるんだよね。』

『うん。マスター、ミミに嫌いって言われて悲しい気持ちになったの?』

『そうだよ』

『うーん、そっか。じゃあ、今回は許してあげる』

PAIに許してもらおう人間というのは、客観的に見てどうだろうか。…どう考えてもダメ人間だった。

『ありがと。そうそう、さっき敵が襲ってきてからの動きについて分析してくれたんだよね』

『うん。マスター、見る?』

『うん、見せて』

分析された敵の情報 艦隊編成、光学兵器の出力、装甲の厚さ、乗員数がオペレーター席のディスプレイに表示される。大きな数値

が並ぶ中、僕の目を惹いたものがある。

『乗艦員数が1?』

『うん。一人のパルスしか見えなかった』

『パルスが見えたの?』

『うん。マスターとこうやって会話してる時みたいに、パルスの流れが見えたよ』

『どこに?』

『うーんと…宇宙空間?』

言葉は理解できるが、内容が理解できない。少し、落ち着こう。

あの艦隊には1人しか人間がいなくて、パルスが宇宙空間で見えた…やっぱり分からないぞ。

ん?待てよ、そういえば、敵の動きは、マリアが我が軍の精鋭でさえできない動きと言っていた。どういうことだ?

我が軍にはどうしてできない?

人間には行動限界があるからだ。AIによる自動化がなされているとはいえ、オペレートするのはにんげんであり、人間が命令を受けてからの反応速度の遅延、キーを押すまでの時間、ミスを恐れての緊張によるエラーなどが行動限界を決定づける。訓練によって慣れることでできる限り早くなるが、上限はある。

なるほど、人間の行動限界を超えた艦隊運動、そして、乗艦員数。見える脳電磁パルス。僕の中で仮説が組み上がる。

『ねえ、ミミ?』

『なあに?マスター』

『ミミって、もしかしたら僕の脳電磁パルスがミミに伝わるのを邪魔することができるの?』



『うん、できるよ?』

『どうやるの?』

『うーんとね・・・』

僕の仮説が正しければ、僕にしかできないやり方で、敵と戦うことができるかもしれない。戦いの高揚感とは違った、よりよいプログレミングを発見した時のような快い緊張がみなぎる。

『ミニ、今から言うことをやっておいてくれる?とても大事なことなんだ』

『うん、いいよ、マスター。あ、でも』

『どうしたの?』

『マスター、お願いがあるんだけど』

『何?』

PAIにおねだりされる僕。字面だけみるとヘンタイそのものである。

『うんとね、すぐにでなくてもいいんだけど。ミニ、身体がほしいなあ』

それは無い物ねだりというものだ。しかし、僕は科学者を目指す者だ。あきらめれば、そこに科学の発展はない。試合終了なのだ。

『うん。僕の持てる力を注いで、ミニに身体を用意するよ』

僕の運命は、こうして決定づけられた。

## 嵐の前

天頂方向を上、標準銀河横断面を基準として地球方向を北とすれば、我々が最短距離を取る場合、メデイニカ星系に東南東方向下側から侵入し、恒星メデイニカの東側を通過して、北西方向上側に抜けるという進路を選ばざるを得ない。しかし、現時点で恒星メデイニカの重力場は東側に傾いており、重力影響域に入ってから加速は通常よりもエネルギーを消費する。したがって、メデイニカ星系に侵入する前の時点で最大速度を得、ちょうど重力影響域に位置するメデイニカ星系第1惑星を利用した増速スイングバイ（すでに推力があるのでパワードスイングバイか）を行い、重力影響域での減速を減らすとともに、一気に亜光速まで加速し小惑星帯に突入することになる。

敵は、重力影響域まで計算していたわけだ。我々が亜光速で小惑星帯に突っ込んで来ることぐらいは誤差の範囲だろう。おそらく、小惑星帯を抜ける切る直前に300隻から500隻が密集隊形でルートをふさぐ形で待ち伏せているに違いない。これへの対策は、ある程度の質量を持った物体を亜光速でぶつけ、穴をあけてそこを突破するかしかない。僕が戦術シミュレーションでマリアの機動艦隊を破った手法である。バカの一つ覚えのような気がするが、戦略用兵器が搭載されていない軽戦闘艦にできる作戦は限られているのだ。

しかし、ミミの分析によって一つの可能性が浮上してきた。僕は、マリアに報告をする。

「艦長、相談があるのですが」

「あら、プライベート通信なんて気が利くわね。」

「傍聴の危険を防ぐためです。他意はありません。それよりも、仮

想ディスプレイを見てください」

「つまらないわね。…ん？これ、どういうこと？」

「私のPAIは、ご説明した通り特殊なものです。自分でもどのようなプログラミング理論に基づいて設計されているのか全貌は分かっています。そして、私のPAIは、様々なオプションを持っています。その一つが、生命探査機能です。調べた結果は信じがたいですが、あの敵艦隊には人間は1人しか乗っていない」

「信じられないわ」

「ええ。ただ、マリア先輩がおっしゃったではありませんか。我が軍の精鋭にもこれほどの動きはできないと」

「うーん、なるほどね。複数の人間の行動限界を破ることができたのは、単数の人間が動かしているからということね。納得はしたくないけど」

「おそらく。原理は分かりませんが、敵は一人で艦隊を動かすシステムを持っているようです。」

「で、これを私に見せたのは、何か意図があつてのものでしょう？」

「理解が早くて助かります。実は、試したいことがあるんです。先ほどの作戦には支障を来たさないとと思うので、許可を願おうと思ひまして。」

「ええ、許可するわ。」

「ええ！？まだ、内容をお教えしていませんが」

「ただし、内容を教える以外にも条件があるわ」

「な、何でしょう。奴隷になるのは無理ですよ」

「そんなこと言わないわよ。心外だわ」

かつて言ったことあるから懸念しているのだ。心外なのは僕の方である。

「条件はね・・・」

マリアから出された条件は、意外なものだった。別に、条件として出さなくてもいつもマリアが僕に無理やりしていることだ。まあ、

いずれにせよ生き残った後の話である。

「巨大質量兵器、用意できました。まさか目の前で、シヨーン君が想像した兵器を見れるとは思いませんでしたわ。って、プライベートル通信中だったんですね。またまた、お熱い事で」

ベルタの報告がディスプレイ上に現れる。

「また邪推です、先輩」

「あら、でもマリアの嬉しそうな表情を見れば、そう推察しても致し方のないことですよ。ね、マリア？」

「う、うるさいぞ、ベルタ。…さて、そろそろ、メディニカ星系に突入するか」

ベルタは、声こそ出していないが、腹を抱えて笑っていた。

航行はいたって順調に進む。順調だ。順調に敵の罠にはまっついていっているのだ。もちろん、敵の罠にはまらなければ、勝利も望めない。虎穴に入らずんば、孤児を得ずである。ちなみに、これは養母が言った言葉ではない。

『ところでさ、ミミ』

『何ですか、マスター』

『ミミなら、あの敵艦隊がやってきた動きができるかな』

『ミミ、一人で動かすんですか？それぞれの艦にミミの指示を受け取るレシーバーがあれば、できる思うよ、マスター』

『そうか、偉いね、ミミは。』

『えへへ』

『じゃあ、あの敵艦隊に乗っていた一人が、攻撃をする瞬間とか、攻撃方法とかパルスから読み取れるのかな？』

『うーん…初めてなら無理だと思うけど、練習すればできるように』

なると思っよ』

『ミミは、ガンバリ屋さんだからね』

『うん！マスター、偉い？』

『偉い。偉い。』

なるほど、ミミならできる。そして、ミミには敵の電磁パルスが見えた。ということは、警戒しておいてもいいだろう。

「艦長」

「なあに？シヨーン」

「できる限り、作戦のこととか、攻撃のことを考えない、ということとはできますか？」

「その必要があるなら、するわよ」

ミミができて敵ができないという保証はない。ミミは視覚で電磁パルスをとらえることができる。攻撃のタイミングや、もしかしたらそれ以上のことを読み取られるかもしれない。

「ええ、未知の敵ですから警戒しておこうと思います。今回、艦長は号令なしでも構いませんか？」

「構わないわよ」

「え？『撃て！』とか言えないんですよ？いいんですか？」

「シヨーン、あなた、私のこと誤解してるわね」

あ、また獰猛な猛禽類のような表情だ。あとで、付きまとわれて色々と言われることが決まったようだ。本当に、口は災いのもとだ。

『ということ、ミミ。タイミングとかすべて任せるけど、構わない？』

『大丈夫だよ、マスター。ミミに任せておいて！』

艦は、第1惑星を利用したスイングバイで加速し、小惑星帯に向かう。亜光速航行に入るとき、僕ら宇宙孤児にはあまり違和感がないが、惑星出身者の心身には極めて負担になると聞く。しかし、マリアもベルタも表向きは平気そうに見えた。ベルタは、たおやかな笑みを浮かべている。こんな時は、絶対心の中で、人を罵倒しているに違いない。マリアは、ニヤニヤしたり、時折頬を赤く染めてポーツとしたりしているが、何を考えているのだろう。

そうこうしているうちに、我が艦と商船団は運命の小惑星帯に入した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1873z/>

---

宇宙孤児の秘密

2011年12月11日21時54分発行